

神田外語大学紀要第 29 号
抜刷 2017 年

The Journal of Kanda University of International Studies Vol. 29 (2017)

ケアンズの「開拓」期における「いわゆる本源的蓄積」
過程の考察の発展に向けて：ティモシー・ボトムスによる
先住民アボリジニの社会史へのまなざし

Towards an Analysis of Primitive Accumulation in the
Colonisation of Cairns: On Timothy Bottom's Socio-historical
Examination on Australian Indigenous People

小野塚 和人

ケアンズの「開拓」期における「いわゆる本源的蓄積」過程の考察の発展に向けて：ティモシー・ボトムスによる先住民アボリジニの社会史へのまなざし

Towards an Analysis of Primitive Accumulation in the Colonisation of Cairns: On Timothy Bottom's Socio-historical Examination on Australian Indigenous People

小野塚 和人

要 旨

本稿は、Bottoms (2013)の書評論文形式を取りながら、観光地としても知られるオーストラリア・ケアンズにおいて、先住民アボリジニが英国からの入植者との間で形成してきた社会史を開拓から 1890 年代に焦点を当てて、考察する。本稿では、第一に、「パイオニアの神話」を問い直すという著者の意図に沿って、本書の内容を検討する。第二に、本書の意義を「いわゆる本源的蓄積」という視点による、植民化過程に即した議論の発展可能性、および、オーストラリア地域研究の観点から評価する。第三に、反対勢力の存在ならびにアジア系移民と先住民の交流についての追加的考察の必要性と、本書の論拠の妥当性という観点から、今後の研究課題を指摘する。

1. 問題の所在

オーストラリアの北東部に位置し、観光地としても知られているケアンズにおいて、先住民アボリジニは、イギリス（以下、英国とする）からの入植者との間で、どのような社会史を形成してきているのか。ケアンズと周辺地域は、近代社

会としての歴史が170年余りと浅く、ヨーロッパやアジアから到来した移民や先住民といった「異質な他者」同士が「未開地」において混淆するなかで、その社会史を形成してきた。本稿は、ケアンズを拠点にして活動を展開する在野の歴史研究者ティモシー・ボトムス (Timothy Bottoms; 1964-[以下、著者とする]) の研究成果『沈黙という謀略(*Conspiracy of Silence*)[以下、本書とする]』に対し、書評論文という形式を取りながら、ケアンズの入植初期における英国人と先住民アボリジニとの社会過程の一面を解明することを目的とする。

本書の著者は、過去30年近くにわたって、ケアンズと周辺地域のアボリジニの社会史に関して、在野で研究を続けてきた。著者は、本書に代表される学術成果の他に、先住民集団バマ(Bama)とジャボカイ(Djabugay)の人々を一般の読者に紹介した冊子などを刊行している(Bottoms 2013, 1999, 1993 など)。著者の博士論文は、ケアンズの自治体の歴史をアボリジニの視点から扱ったものであり、ケアンズ市議会からも研究助成を得て執筆がなされている。その博士論文は本書の原案にもつながっている。

本書については、主にオーストラリア国内で書評がいくつか発行されている。ただし、いずれも先住民研究や歴史研究の媒体において、内容の簡潔な紹介とオーストラリア国内での先住民研究史における意義の評価にとどまっている(Bennett 2014; Kerins 2014; Nettelbeck 2014)。また Baldry et al. (2015)は、本書で紹介されている内容がジェノサイドにあたるかをめぐって、検証を行っている。これに対し、本稿では、Marx(1867=1972)のいう「いわゆる本源的蓄積」という視点、さらに、ケアンズの社会史とオーストラリア地域研究という観点から、本書の意義を探求することとする。

ケアンズと周辺地域の社会史は、下記の6つの時期に大別できる。オーストラリアでは、いわゆる革命のような政変が起こることはなく、いずれの時期でも漸進的に社会編成が変化していつている。従って、時代を明確に区分することは困難であり、一定の幅を持たせておく必要がある：

ケアンズの「開拓」期における「いわゆる本源的蓄積」過程の考察の発展に向けて：
ティモシー・ボトムスによる先住民アボリジニの社会史へのまなざし

- 1) 有史-1880年代頃：先住民アボリジニとの闘争を伴う、英国人の入植。
- 2) 1880年代頃-1890年代：アジア太平洋地域からの労働力（主にメラネシア人と中国人）による「開拓」の進展。
- 3) 1890年代-1901年頃：日本人労働者による耕作の進展と、現在の対日・対アジア向け輸出作物の栽培開始。
- 4) 1900年代-1970年代：白豪主義時代におけるイタリア人とギリシア人による、アジア人労働力の代替（一部の日本人など特別な技能を有するアジア系労働者は残留）。
- 5) 1980年代-1990年代：日本企業によるリゾート開発の進展と、観光による急速な都市化の進展。
- 6) 2000年代-現在：新市場からの観光客導入やカジノの新設計画を伴う観光業の再興隆期、あるいは、町の将来の在り方をめぐる模索期。

本稿での考察対象は、1)と2)の「有史-1890年代」とする。この時代においては、アボリジニと英国人との関係がケアンズと周辺地域の社会史の主な論点となる。

この時代区分を踏まえつつ、本稿は以下の構成を取る。第一に、本稿では、本書の主要な論点と内容の紹介を行う。本書はケアンズの位置するクインズランド州（以下、QLD州とする）内各地域にて発生した多様な事件の詳細を、独立して記述していく形式を取っている。そのため、本稿ではそのすべてを紹介することは出来ない。従って、本稿ではケアンズと周辺地域の記述に焦点を当てることとする。第二に、本書の意義について、二つの論点から評価をしたい。まず、Marx(1867=1972)のいう「いわゆる本源的蓄積」の観点、次に、ケアンズに関連する先行成果の中での意義を評価する。第三に、本書のもたらす研究課題について、反対勢力の存在、ならびに、先住民とアジア系移民との交流についての追加的考察の必要性、さらに、証拠の妥当性という観点から考察を行う。

2. 本書の概要

2-1. 本書の目的

本書では、全体を通じて、QLD 州の開拓期に先住民アボリジニに対してどのような抗争が起こったのかについて、一次資料をもとにした記述が展開されている¹。第1章は、Post-Convict Era and the Future South-East Queensland、第2章は、European Invasion of the Future Southern Queensland、第3章は、European Invasion of the Future Central Queensland、第4章は、South-West Queensland-the Channel Country、第5章は、Poisoning and Sexual Exploitation、第6章は、Early Gulf and Central Queensland、第7章は、The Frontier Moves to Far North Queensland and Cape York Peninsula、第8章は、Dark Deeds in the Northern Rainforests- The Tully and Cairns Districts、第9章は、The Gulf Country and Western Queensland、第10章は、Queensland's Disreputable Reputation となっている。

多数の事件を記録する目的は、主に下記の2点に区分できる。第一の目的は、本書の表題でもある陰謀とも言うべき沈黙 (conspiracy of silence) を打破することにある。先住民(First Australians)の経験してきた歴史に対しては、「誠実な歴史家」による隠された史実を解明しようとする試みがある一方で、その成果を黙殺・封殺する勢力が存在してきたとする。先住民の処遇について反対する意見は、どの時代にも存在してきたが、看過され続けてきた。

こうした傾向もあり、先住民は国の自己定義(national identity)の中で適切な位置・地位に存在していない。現在のオーストラリア人は、植民地時代の開拓前線で発生した事件には責任はないが、そうした出来事が実際に存在したことを認める責務があると、著者は再三にわたって強調する(p.207 など)。当時の「法律」の下で、入植者が先住民に行ってきた犯罪的行為を認識し、承認していくことで、本当の意味での和解と、より成熟した国家の在り方を考えていくことが出来ると

¹ 本稿では、特に断りのない場合、ページ数の表記は本書のものである。

ケアンズの「開拓」期における「いわゆる本源的蓄積」過程の考察の発展に向けて：
ティモシー・ボトムスによる先住民アボリジニの社会史へのまなざし

している(p.208)。

第二の目的は、「パイオニアの神話(the Pioneering Myth)」にアンチテーゼを提示することにある。「パイオニアの神話」とは、1890年代から隆盛を見せた言説であり、「未開地」の探検、荒地の開拓など、入植最初期の英国系の独立経営者(牧畜家、農民など)たちの勇敢さ、自立心、忍耐力を称賛する(p.7)。ただ、こうした「パイオニアの神話」では、アボリジニについて言及されることもなく、開拓前線での暴力、「特別保護区」や「教育施設」での権威主義的かつ抑圧的な扱いは取りざたされることはない。あくまで、オーストラリアの入植・定住過程(settlement)は平和裏のうちになされたのだとする「虚偽と欺瞞に満ちた」言説が定着をしている。しかし、こうした「神話」における開拓前線での出来事は、一次資料で展開される世界とは大きく異なる。「パイオニアの神話」はオーストラリア入植期の暴力的な基盤を否定しつつつけてきている(p.9)²。

2-2. 「パイオニア」たちと先住民の社会過程

本項では、上述の目的に鑑み、主にケアンズと周辺地域の事件に焦点を当てながら、「パイオニアの神話」に登場する人物に沿って、本書の内容を紹介する。本書で考察される史実は、現地の人々が英雄視する人物の知られざる裏側を暴露するものであり、いわばアイドル的な存在を問い直していつている。下記の3名は、いずれもオーストラリアの開拓を扱った様々な文献で「パイオニア」ないし「英雄」として取り上げられている。

1) ジョージ・ダリンブルとエドムンド・ケネディ

² 著者によれば、開拓は、土地取引・土地利用による利益獲得という動機に支えられて拡大していった。「パイオニアの神話」は、その本来の動機の部分を捨象して出来た「歴史修正主義的な誤謬」であると、著者は一蹴する。2008年の映画「オーストラリア」や、2011年のテレビドラマ「ワイルド・ボーイズ」などは、この「神話」にもとづいた「ロマンティックなお笑い」であると著者は批判している(p.206)。

タリー(Tully)川沿岸に居住していた、ジリバル(Dyirbal)という言語グループに属する人々は、4つの集団に分かれて生活を営んでいた(南部にギラメイ[the Girramay]、北部にジル[the Djiru]、河川沿いにグルンガイ[the Gulungay]、西部にジリバル[the Jilrribal])。この4集団は数千年にわたって文化交流を持ち、祭典を共催したりしていた(pp.133-4)。ところが、1848年、探検家エドムンド・ケネディ(Edmund Kennedy; 1818-48)率いる探検隊が、メヌンガ・クリーク(Menunga Creek)に到来したことで、ギラメイの人々に4人の犠牲者が発生する事態となった。

この事件から16年後の1864年、ジョージ・ダリンプル(George Elphinstone Dalrymple; 1826-76)率いる探検団が、沿岸部に自治体カードウェル(Cardwell)を設立するために到来してきた。ダリンプルはジェームズ・モリル(James Morrill)という通訳者を率いていたが、ギラメイの人々と意思疎通を図ることが出来ず、一方的に土地の占有を宣言することとなった。その結果、ジリバル語話者の人々との間に闘争が発生し、先住民側に多数の犠牲が生じた。しかし、ダリンプルは、こうした一連の「功績」もあり、探検の後は政治家に転身することとなった。

ジリバル語話者集団に起こった苦難はこれだけにとどまらなかった。グレートバリアリーフにて船舶マリア号の海難事故が発生した際、船員14人が上陸時に先住民ジルの人々に攻撃されたのに対して、後の報復で43人の先住民が犠牲になった³。上陸後、船員の食糧を確保するために、現在のタム・オシャンター・ポイント(Tam O'Shanter Point)が供給拠点として選ばれたが、その場所の確保のために先住民側に88人の犠牲者が出た(pp.134-5)。

2) ロバート・ジョンストン

ロバート・ジョンストン(Robert Johnstone; 1843-1905)は卓越した手腕を発揮し

³ マリア号以外にも、サファイア号(1859年)、スプーワー号(1869年)など、海難事故で漂着したヨーロッパ系入植者の船舶が、先住民の攻撃に遭遇する事件が同時期に頻繁に発生した。こうした事件を契機として、現在の自治体サマーセット(Somerset)の設立が提案された。

ケアンズの「開拓」期における「いわゆる本源的蓄積」過程の考察の発展に向けて：
ティモシー・ボトムスによる先住民アボリジニの社会史へのまなざし

た警官として名が残されている。ケアンズ南部のイングハム(Ingham)で2人のヨーロッパ系住民が先住民の攻撃を受けたことについて、ジョンストンは警官隊と共に報復行動に出て、35人の先住民の犠牲をもたらした(p.114)。ジョンストンは、1869年に一旦警察を辞任して、カードウェルにて、サトウキビ農園(Bellenden Plains Sugar Plantation)を経営した。しかし、再び警官として任用されて、上述のマリア号の海難事故の際には、先住民に対する報復を主導した。また、1873年、ジョンストンはダリンブルの率いるQLD州北東部の探検に参加し、ケアンズからソーンバラ(Thornborough)まで踏破した。しかし、その過程で、ダブル島(Double Island)に住むイリガンジ(Yirriganydji)の人々の居住地域への侵略行為に加担した(p.115,145)。1880年以降、ジョンストンは、ケアンズ南部のイングハムやブンダバーグなどで活動を展開した。ジョンストンは英雄視されていて、地名や河川の名前にもなっている。しかし、実際の警官としての業務は、善行ばかりとは言えなかったのである。

3) ジョン・ジャーディン

ケアンズ北部に位置するケープヨーク半島を開拓する際においても、衝突は常に発生した。とりわけ、ケアンズと同半島をつなぐ電信線を維持するために、先住民と頻繁に抗争状態に陥ることとなった(p.115)。こうした先住民の自衛的手段としての攻撃に対する報復を提案していたのは州知事ジョージ・ボウエン(George Bowen; 1821-1899)であり、実行に移したのは下級判事(magistrate)であったジョン・ジャーディン(John Jardine; 1807-74)であった。ジャーディンは1861年にQLD中央部のカリン・ラ・リング(Cullin-la-Ringo)での対先住民攻撃を陣頭指揮した人物として知られ、芳しい評判を有してはいなかった。ジャーディンはアボリジニの人々に対して情け容赦なく、市民的には取り扱わなかった⁴。しかし、

⁴ 当時、ジャーディンらに同行していた宣教師ジャグ(F.C. Jagg)とケネット(William Kennett)の回想では、宣教師は探検団から協力を求められることはなかったとする。ジャグやケネットが個人的に「キ

QLD 州政府からすれば、ジャーディンは先住民に対しては「現場での豊富な経験 (practical experiences)」を有した人物であるとされ、そうした行為も容認されていた(p.116)。

4) リチャード・デインツリーとウィリアム・ハン

リチャード・デインツリー(Richard Daintree; 1832-78)は地質学者であり、ウィリアム・ハン(William Hann; 1837-89)は金を発見した探検家であるが、先住民の弾圧の契機を作った人物として本書に登場する。デインツリーやハンによる地質調査の結果、1866年にスター・リバー(Star River)、1867年にケープ・リバー(Cape River)、1870年にはエサリッジ(Etheridge)、1871年にレイベンスウッドおよびチャールズ・タワーズ(Ravenswood and Charles Towers)、1873年にはパルマー・リバー(Palmer River)にて金が発見された⁵。元来、こうした場所は飲料水が不足し、ヨーロッパ人には到達が困難な場所であった。しかし、この発見により、1年の間に合計で2万人近くの人々が金鉱へと押し寄せた。金鉱の発見はオーストラリア南部の住民が北部に移住する要因のひとつを形成した。しかし、この過程でその土地を有していた先住民グーグ・イミディル(Guugu Yimithirr)やググ・ワラ(Gugu Warra)の人々は、深刻な被害を受けることとなった(p.117)。

2-3. 先住民を「消散」させるための多様な手段

英国系の入植者たちは、土地の確保にあたって、先住民に直接手を下しただけでなく、水飲み場や食料(ソーダブレッド[damper]など)に薬物(ストリキニン)を混入させて、先住民を「消散(disperse)」させる手段を採用した(pp.80-2)。確かに、

リスト教の精神」を持って、先住民に友好的に接した限りにおいては、アボリジニの人々は市民的に対応してくれたと回想している(p.125, 128)

⁵ デインツリーやハンは探検の最中で、こうした地名を新たに付与していった。代表的な事例に、Palmer River、Lynd River、Tate River、Walsh Riverの命名がある。この過程で先住民の土地はヨーロッパ系入植者の所有へと書き換えられていったのである。

ケアンズの「開拓」期における「いわゆる本源的蓄積」過程の考察の発展に向けて：
ティモシー・ボトムスによる先住民アボリジニの社会史へのまなざし

ヨーロッパ社会から隔絶されていたケアンズで、入植者たちは互いに協力して、自衛せざるを得なかった、という言い分も意味をなさないわけではない。いわば「積極的な自衛策」として、この手法は広く採用され、ハーヴェイ湾(Harvey Bay)やフレーザー島(Fraser Island)といったQLD州の南部地域に限らず、ホジキンソン金鉱(Hodkinson Goldfield)、フレッチャー・クリーク(Fletcher Creek)など、ケアンズ近郊地域にも適用された。特に、ケアンズを訪れる観光客が利用するキュランダ鉄道(Cairns-Kuranda Railway)を建設する際、1886年から1893年にかけて、イリガンジの人々にこの方法は適用され、現在のケアンズ市街地の位置する場所に居住していたバマの人々も同様の被害にあった(p.89)。なお、こうした薬物を使用した「消散」は、当時、カンガルーの頭数調整に用いられた手段と類似しており、アボリジニが人間としての扱いを受けてこなかったことを示している(Hatton and Thompson 2006:24)。

こうした「処置」の実行は、ケアンズと周辺地域に限定しても氷山の一角に過ぎず、QLD州内でも同様の事案が無数に発生していた。北米大陸の開拓が東部から西部に進行したのに対して、オーストラリアでは、南部から北部へと開拓前線が拡張していった。QLD州は南部よりも温暖であり、先住民人口が相対的に多く、それゆえに「対処」すべき数も多い。しかし、「対処」をすれば、反撃の危険性は高まる。さらなる開拓前線の北部方面への拡張は、より温暖な地域への拡大を意味し、対峙する先住民の数は増加する。入植者の恐怖心はさらに増大し、薬品を用いた「消散」策がより広範に採用される、というサイクルが繰り返されることとなった。

そうした行為を正当化するために、先住民は土地を侵害してくる「悪」として描写され、暴力を伴う先住民への処遇については「教訓を与える(teaching the blacks a lesson)」ものとして認識されていった(p.181)。当時の報道や書簡でもそうした姿勢は広く支持されていた。土地を大規模に収用して、放牧地の拡大が進行した1840年代から1850年代にかけて、入植者と先住民との衝突が急速に増加して

いった。入植者側は最新の銃器で武装し、さらには、伝染病をもたらすなどして、先住民集団の抵抗能力を無力化していった(p.125,180)。これと並行して、電信網などのインフラ整備が進行し、現在のオーストラリアが形成されていくこととなった。

QLD州は発足当初に財政難に苦慮したとされ、土地取引による地代は、歳入を得るための有用な手段であった(pp.184-5)。歳入の必要性もあり、QLD州政府は、開拓時の諸事件を看過した。確かに、土地開拓の過程での金鉱の発見は、歳入と人口の増加をもたらした。同時に、開拓地での牧畜、鉱業、材木業、サトウキビ栽培などは、海外との交易と関係する諸産業の地盤を整備した。

先住民を保護するはずの初期の QLD 州の政治家たちは、開拓によって確保された土地から、地代収入を得た張本人であり、土地に継続的に投資を行っていた。政治家に加え、有力な経営者たちも先住民の犠牲の上に富を形成していった。入植時の侵略行為を糾弾したり、開拓前線の拡張を停止することは、彼ら自身の利害に反することとなる。こうした政治家や経営者たちは、アボリジニたちが自然権を有した存在であることを否定し、拒否するような態度を一貫させていた(p.186)。

こうした中でも、アボリジニの処遇に反対していた人々是一部ながら存在したとして紹介されている。まず、スコットランド出身のカトリック宣教師ダンカン・マクナブ (Duncan McNab; 1820-96) は、アボリジニに個人としての尊厳を認めるべきであるとし、QLD 州政府の上層部に加え、ローマ教皇庁や英国政府にも、対先住民の処遇改善を要求した。西オーストラリア州に移住後、マクナブはアボリジニに職能教育を施そうとしたが、一部成功を収めただけで、先住民の処遇改善への願いは届かなかった(pp.7,137,197-8)。次に、1860年代から80年代にかけて、アルフレッド・デヴィッドソン(Alfred Davidson; 1812-81)とウェスタン・ウッド(Western Wood; 1830-78)は、QLD 州の先住民への対応に抗議し、メラネシアからの労働力導入にも人道的見地から反対していた。彼らは、ロンドンを拠点とする

ケアンズの「開拓」期における「いわゆる本源的蓄積」過程の考察の発展に向けて：
ティモシー・ボトムスによる先住民アボリジニの社会史へのまなざし

先住民保護協会に所属していた。しかし、現地紙 *The Brisbane Courier* では好意的に取り扱われず、亡くなった際にも言及されることはなかった(pp.6-7,17,197)。さらに、新聞記者であったアーサー・ボーガン(Arthur James Vogan; 1859-1948)は、1890年に書籍 *The Black Police* を出版して、入植者の行為について包括的な告発を行ったが、その結果、非難が集中し、記者としての生活を継続できなくなってしまう(p.90,139)。全体として、アボリジニの扱いに反対を唱えるものは、白人社会から排除されていった。著者はこの時代において、入植者たちはアボリジニやその社会の構造を理解していなかったとしている。

2-4. 抑圧を正当化していった諸言説

アボリジニへの非人道的な対応の背景には、様々な要因があると著者は指摘する。第一の要因は、QLD州を始めとしたオーストラリアは、英国系入植者からすれば一時的な出稼ぎ先として見なされていたことにある。1870年代には、各地の政変によってヨーロッパを離れる移民が多数発生したと言われる。さらに英国の繊維産業が興隆して、メリノ種の羊の需要が高まり、その生産の促進を意図して、オーストラリアに英国から移民が到来した。こうした19世紀の英国系移民の間には、自らは「渡り鳥(birds of passage)」であり、「短期間のうちに利益を得て、帰国する」という心性が広く見られた(pp.186-7)。このような「渡り鳥」という発想のもとでは、先住民は利殖の障壁でしかなく、開拓前線での加害行為はより加速される方向に働くこととなった(p.187)。

第二の要因は、当時の社会思想的な背景に拠る。これまでも青山(2008)などで分析されているように、アボリジニの弾圧を正当化したのは、当時の水準で「科学的」とされてきた諸言説であった。当時の「偉大なる存在の鎖」説に代表されるように、英国の植民者は自らが人類の進化の頂点にいたいと思いついでいた(p.3)。さらに、「骨相学」的な知見が、アボリジニの人々の能力に偏見を流布させることになった。このように「異人種」を客体として扱う「科学的」な見方は、

熱帯地域で英国系植民者が好まない労働をさせることを正当化する上で、大切な理由付けのひとつになった。同様に、当時の社会進化論による「滅び行く人種」という見方や「適者生存」という発想も、アボリジニの悲劇的経験を合理化するものとして植民地内に広がっていった。人種の位階を決めるような「科学的」な議論によって、アボリジニと親交を結んだりすることも忌避されるようになっていった(p.4)。

こうした思想的背景も相まって、アボリジニの独立の機会は、1897年から、1928年、1934年、1939年、1965年、1971年へと続く一連の立法によって封じられ、先住民は管理と統御の対象となり続けていった(p.199)。特に、1897年の立法ではQLD州の先住民の保護が推進されるはずであったが、保護と人道主義という名目で、先住民の子どもを「教育施設」に連れ去ることとなり、先住民共同体にとって、より深刻な影響がもたらされることになった(pp.199-200)。

3. 本書のもたらす意義とインプリケーション

3-1. オーストラリア社会の成立と「いわゆる本源的蓄積」過程との関連をめぐって

本書はMarx(1867=1972)のいう「いわゆる本源的蓄積」の過程を描写したのとしてとらえることができる。とりわけ、それまで先住民の居住する土地であったオーストラリアに、資本主義社会としての社会編成を持ち込むプロセスの側面を描写したのが本書である。その過程を切り取る概念のひとつとして本源的蓄積は有効である。この概念を援用した論考は、これまでの唯物論系の論者によって複数みられるものの、植民地化の過程に適用できるような議論は少ない。ここでは、山崎(2015;2013)の整理に依拠しながら論考を進めることとする。

本源的蓄積過程とは、「資本＝賃労働関係の歴史的起点をなす、土地と労働力との原初的な分離過程のこと」であり、この過程で創出される資本は、「頭から爪先まで、毛穴という毛穴から、血と汚物をしたたらせながら生まれてくる」(Marx

ケアンズの「開拓」期における「いわゆる本源的蓄積」過程の考察の発展に向けて：
ティモシー・ボトムスによる先住民アボリジニの社会史へのまなざし

1867=1972:419,433; Harvey 2010:300; 山崎 2015:49)。そこでは、一方での本源的蓄積の全歴史過程の基礎である農村住民と土地との分離と、他方での、資本の初期の形成過程を二つの軸としながら、賃労働者としての人々の統治や、資本蓄積の歴史的な運動が編み込まれている(山崎 2015:49; Marx 1867=1972:359-60) ⁶。

この本源的蓄積の過程は、当該地域住民の「生存原理」の否定として現れるものとなる。山崎(2015:51)によると「生存原理」とは、下記のように定義される：

(共同体における)経済活動の目的は、その構成員の生存と世代を超えたその再生産を保証するための、農産物を中心とする自給的生産物の生産と再分配にある。(中略)土地の共同所有や共同体内で行われる富の備蓄とその再分配機能は、この目的を達成するためにあるのである。これらは時に「共同体規制」と呼ばれてきたものだが、それらはいくまでも「生存原理」のための手段である。そして、このような土地の共同所有や共同体内での富の備蓄と再分配機能には、それに対応する法(慣習)が並び立つ。

本源的蓄積は、資本主義という独自の生産様式の前に、共同体を基礎とした「生存原理」による共同体構成員の共存を目的とした社会の在り方を否定することである。本源的蓄積の「開始期」の始まりは、共有地の私有化(「横奪」)が着手される時である。本源的蓄積の「初期段階の終わり」は、共有地の私有化が完了され、「農民的農業を中心とする非資本制要素」が分解した結果として、「資本制社会」が「自前の労働力調達機構を獲得」して確立した時点となる(山崎 2015:50,53-4; 2013)。

本書において展開されるのは、この本源的蓄積の初期の初期段階であり、先住民の共同体が解体される過程である。ここから、具体的にケアンズと周辺地域のアボリジニ共同体が、いかにして「教育施設」に收容され、どのような分野で労

⁶ この過程は、国・地域別に多様性を有する。Marx (1867=1972:362)は、「(農民からの土地)収奪の歴史は国によって違った色合いをもっており、この歴史がいろいろな段階を通る順序も歴史上の時代も国によって違っている」と論じていて、オーストラリアなど、イギリス以外の地域にこの議論を適用することも可能である(山崎 2015:54)。

働力として動員されていったのかについては、考察の余地を残している。ケアンズのキリスト教系「教育施設」での生活が一部、Bottoms (1999)に紹介されているが、先住民の労働分野とその内容、実際の「教育」の実態など、追加的な調査が必要である。本源的蓄積の理論的知見をもとに、実際にどのような社会過程が先住民との間に展開されたのかは、今後の研究課題となる。

3-2. オーストラリア地域研究とケアンズの社会史における本書の意義

ケアンズは一見、オーストラリアにおける一地方自治体のひとつに過ぎないように見えるかもしれない。しかし、その社会変動の考察は、小野塚(2013,2011)より、下記の意義を有している。第一に、近代社会としてのケアンズという場合は、入植から170年程度の比較的短いタイムスパンの中で、地理的に「北」からのアジア的な勢力と「南」からのヨーロッパ的な勢力の間での「異質な他者」とのせめぎ合いのもとで、形成されてきた。第二に、地理的にアジアと近接し、船舶での移動が主流であった時代では、ケアンズや木曜島を含む QLD 州北部は、各国からの船舶の中継地点であり、ヨーロッパ的な文明とアジア的な文明が交錯する地点に存在してきた。第三に、そうした背景もあって、ケアンズの自治体としての発展には、入植以来、現在においてもアジアからの移民や労働者の存在が不可欠となっている。第四に、近代社会としての歴史の浅さに加え、ケアンズは周辺の自治体（特に大都市圏）から地理的に隔絶しており、考慮すべき変数が比較的少ない。それゆえに、ケアンズでの社会変動は、社会理論がそのままの形で反映されやすいという特長を有する。

社会分析におけるこうした意義を有するにもかかわらず、ケアンズと周辺地域は、これまで学術研究の対象となることがほとんどなかった。このことは、オーストラリアの北西部に位置するブルームやダーウィンといった自治体がオーストラリア国内外の研究者によって、数多くの考察の対象になってきたこととは大きな対比をなすものである。この背景として、ケアンズでは1980年代以降に都市化

ケアンズの「開拓」期における「いわゆる本源的蓄積」過程の考察の発展に向けて：
ティモシー・ボトムスによる先住民アボリジニの社会史へのまなざし

が急速に発展したこと、さらに、都市化が進行する以前は研究対象としての自治体の特色に薄かったことなどが、その要因として考えられる。とりわけ、現在でもケアンズの市街地には先住民が数多く往来している。それにもかかわらず、この地域の先住民の社会史に関する学術研究では、著者の論考が唯一の成果であり続けている。

この他に、ケアンズと周辺地域の「有史-1890年代」の様相を扱った成果は少ない。Fitzgerald (1984)と Fitzgerald et al.(2009)は、ケアンズと周辺地域を含むQLD州の開発における有力人物の施策を記述している。Bolton (1963)は、欧州系移民によるサトウキビ農場の運営と関与について考察している。また、ケアンズを含むQLD州の日本人サトウキビ労働者のイメージを扱った成果に、村上(2003)がある。さらに、May(1983,1974)と Robb(2004)は、白豪主義以前の中国人労働者に注目し、ケアンズ郊外でのプランテーションでの労働と、市街地におけるチャイナタウンでの中国人労働者の商業活動を考察している。また、非公刊の成果では、ケアンズ歴史研究会(Cairns Historical Society)において、現地住民による「開拓」期の自治体の歴史や個人史の考察が存在する。

しかし、こうした論考には、英国系植民者やアジアからの移民が考察されることはあっても、先住民が言及されることは少ない。この状況は、著者自身、直接筆者に語っている点であり、これまでの現地住民による歴史研究が、白人中心主義的であり、歴史を語っているようであり、先住民という本質的部分には踏み込めていないことを指摘していた。こうしたなかで、本書は、先住民の経験を取り上げることで、ケアンズと周辺地域の社会史の新たな地平を切り開いていると共に、オーストラリア地域研究としても事例としての意義に富んだ場所を取り上げ、その考察の発展に寄与している。

4. 今後の研究の発展に向けて

本書には、下記の課題を残してもいる。第一に、先住民の処遇に対する反対勢

力にも言及があるが、記述をより展開すれば、バランスの取れた論考となったはずである。英国本国、そして、植民地社会側にも、先住民への非人道的な扱いに対して反対を唱える勢力は一定の厚みを持って存在していた。本書で示されるような開拓前線での抗争状態に対して、すべての人が肯定的に考えていたわけではなかったことは、もっと説明があつて良かったのではないか。キリスト教の教義を恣意的に解釈して、侵略を正当化するような立場とは異なり、人道的な解釈と実践を行った事例もあった。ただし、その人道主義は、Pilkington and Garimara (1996)に描かれるような「温情主義」となることもあったことには注意が必要である。

第二に、先住民の経験した社会史を描くにあたって、全体として、英国系入植者対アボリジニの関係が主たる考察対象となっていて、日本人、中国人、メラネシア人といった移民・外国人労働者たちが本書に登場することはほとんどない。ケアンズは、とりわけ 19 世紀末期においては、中国系労働者だけで町の人口の 20% 近くを占める時期が存在した(May 1983:13; 小野塚 2013:104)。ケアンズのいわゆる「下層労働」を中国人労働者が行い、郊外の農場での耕作作業は、日本やメラネシアからの労働者が担うなど、アジア太平洋地域からの移民は、町の運営に大きな役割を果たしていた。そうしたアジア太平洋地域の人々とアボリジニとの社会関係を含めた考察へと発展できれば、本書の知見はより豊かになるであろう。アボリジニとアジア人との社会過程について、Ganter(2006)と Stephenson (2007)は、ケアンズと周辺地域には一部言及するにとどめており、考察の余地を残している。この点は、著者と筆者にとっての今後の研究課題となる。

第三に、本書の知見には依然として論争が残る。当時のアボリジニは文字を有していなかったため、その検証に、先住民共同体のオーラルヒストリーを用いている場合も多い。そして、入植者側の文書も、公文書に加えて、日記や手記を根拠として使用する点があるなど、正確な事件の全容や犠牲者数を特定できないこともある。そのため、事件の詳細について、確固たる証拠が伴わない場合も少

ケアンズの「開拓」期における「いわゆる本源的蓄積」過程の考察の発展に向けて：
ティモシー・ボトムスによる先住民アボリジニの社会史へのまなざし

なからずある。研究者の間でも全体の犠牲者の試算には幅があり、ヘンリー・レイノルズ（Henry Reynolds）は1788年から1930年間のアボリジニの犠牲者数を全国で2万人と試算し、レイモンド・エヴァンス（Raymond Evans）はQLD州だけでも5万人と推計している(p.181)。この推計には犠牲者の数が過剰に算出されているとの批判もあるという。

ただし、これらの点は、開拓前線で発生した出来事を記録し、謀略とも言うべき沈黙を解き、真の和解に向けて新たな成熟した国家の在り方を再考するという本書の目的を損ねるものではないと判断する。

5. 結論

本稿は、Bottoms (2013)の書評論文形式を取りながら、下記の論点について考察をしてきた。本稿では、第一に、著者の意図であるオーストラリアの「パイオニアの神話」を問い直すという観点から、その「神話」に登場する人物を主軸に据えて、本書の内容の紹介を行ってきた。著者からすれば、オーストラリアの開拓期における「英雄」とされている人物の一部は、その背景でアボリジニを苦境に陥れており、その行為を無条件には賞賛できないということになる。第二に、本書の意義として、「いわゆる本源的蓄積」という視点から、その議論の発展可能性について論考を行った。また、本書がケアンズの社会史の考察に新たな地平を切り開いていることに加え、オーストラリア地域研究において考察の対象としての意義に富んだ場所を取り上げ、研究を発展させた意義を評価した。第三に、今後の研究課題として、先住民の取り扱いに反対する勢力についての追加的考察と、アジア太平洋地域からの労働者との関係性に関する論考の必要性、さらに、資料上の制約から本書の知見には一部論争を残すこと、を指摘した。

本書の最終目的は、オーストラリア社会の将来像を構想するにあたって、アボリジニの存在を明示的に取り入れていくことの助とすることにある。著者は、今後のオーストラリアのあり方を決めていく上で、過去にアボリジニが経験せざ

るを得なかった出来事を認知し、誠実に向き合っていくことが欠かせないとしている。2015年から在任する首相マルコム・ターンブルは、1990年代のオーストラリアの共和制化をめぐる国民投票運動の中核に位置していた人物である。オーストラリア・デーの近辺など、それぞれの節目で、共和制化に向けた議論も再びなされつつある。そうした中で、一連の報道では、先住民との和解(reconciliation)や先住民の諸権利の承認(recognition of indigenous rights)という表現が頻繁に登場している。こうしたオーストラリアの国内的な潮流に対して、本書の知見は各市民の共存に大きく寄与するものと期待される。

参考文献：

- 青山晴美. 2008. 『アボリジニで読むオーストラリア』明石書店.
- Baldry, H., McKeon, A., and McDougall, S. 2015. 'Queensland's Frontier Killing Times'. in *QUT Law Review* 15 (1) pp.92-113.
- Bennett, M. 2014. 'Book Review'. in *Journal of Royal Australian Historical Society* 100 (1) pp.117-18.
- Bolton, G. 1963. *A Thousand Miles Away*. Canberra: The Jacaranda Press.
- Bottoms, T. 2013. *Conspiracy of Silence*. Sydney: Allen and Unwin.
- -----, 1999. *Djabugay Country*. Sydney: Allen and Unwin.
- -----, 1993. 'The World of the Bama'. in *Royal Historical Society of Queensland Journal* 15 (1) pp.1-14.
- Fitzgerald, R. 1984. *From 1915 to the Early 1980s*. St Lucia: UQ Press.
- Fitzgerald, R., Megarrity, L., Symons, D. 2009. *Made in Queensland*. St. Lucia: UQ Press.
- Ganter, R. 2006. *Mixed Relations*. Perth: UWA Press.
- Harvey, D. 2010. *A Companion to Marx's Capital*. London: Verso.

ケアンズの「開拓」期における「いわゆる本源的蓄積」過程の考察の発展に向けて：
ティモシー・ボトムスによる先住民アボリジニの社会史へのまなざし

- Hatton, B. and Thompson, L. 2006. 'Kangaroo'. in Harper, M. and White, R. ed. *Symbols of Australia*. Sydney: UNSW Press.
- Kerins, S. 2014. 'Book Review'. in *Australian Economic History Review Studies* 54 (1) pp.89-92.
- Marx, K. 1867. *Das Kapital* (=1972. [岡崎次郎訳]『資本論 第一卷第三分冊』大月書店)
- May, C. 1983. *Topsawyers*. Townsville: James Cook University.
- -----, 1974 'The Chinese Community in North Queensland'. in *UQ NQ History Series*.
URL:http://espace.uq.edu.au/eserv/UQ:241794/Lectures_on_NQ_History_S1_CH9.pdf
pdf (アクセス日：2016年9月25日).
- 村上雄一. 2003. 「クィーンズランドの日本人砂糖黍年定期契約労働者のイメージ」『オーストラリア研究』(15). pp.81-90
- Nettelbeck, A. 2014. 'Book Review'. in *Journal of Australian Studies* 38 (2) pp.252-53.
- 小野塚和人. 2013. 「観光地ケアンズの系譜と『発見』」『オーストラリア研究』(26) pp. 99-112.
- -----, 2011. 「観光地ケアンズの生成と日本企業」『オーストラリア研究』(24) pp.40-55.
- Pilkington, D. and Garimara, N. 1996. *Follow the Rabbit-Proof Fence*. St Lucia: UQ Press.
- Robb, S. 2004. *Cairns Chinatown Heritage Study*. Cairns: Cairns Historical Society.
- Stephenson, P. 2007. *The Outsiders Within*. Sydney: UNSW Press.
- 山崎亮一. 2015. 「本源的蓄積の始点と終点」『農業問題研究』46 (2) pp.49-56.
- -----, 2013. 「本源的蓄積論の理論的再検討」『農業問題研究』44 (2) pp.42-52.